

片岡良一

子規の小説

子規の小説

現代日本文学全集卷十一の『正岡子規集』に、「曼珠沙華」（明治三十年）「花枕」（同上）「月の都」（二十五年）と、三篇の小説が収められている。僅かなものであるけれども、それだけでも子規の世界を一通り探索させる手がかりにはなり得るだろうと思う。それを試みる。

それにはまず「花枕」から読んで行くのが便宜らしい。恐らく子規の小説中で最も著名なものではないかと思われる此作は、子規の持っていた自然への深く歎称的な

関心と、それを凌ぐ近代人的な現実性の強さを、相当端的に打出したものになっている。「白き羽」を持った「光」と、「黄なる羽」を持った「匂」と、その二人の「美しき神の子」が作った自然の玉座——あらゆる美しい花を集めて作った神の「いでまし処」は、現実苦に苛まれる若い少女を救い上ぐべき、趣致と光明との世界であつた。「光」と「匂」の遍漫する美しい自然は、つまり子規にとって、苦娑婆に喘ぐ人間に対する光明と趣致との救いの場所であつたのだ。そういう自然観は子規として無論当然のものであつたらう。が、「花枕」の少女

は、そういう場所からの救いの手を、一応は感謝に満ちて掴みながら、現実の世界に残した妹の上を案じて、結局にその救いの手を離れ、「総身泥の如く」なる迄現実苦に塗れて行くことになるのである。其処に子規の傷心があったのかも知れない。だから現実苦に齷齪するのをやめて、悠々自然の懷に遊べと云おうとする子規であったのかも知れない。が、それは今此処にはさまで重視を必要とすることではない。ただ此の「花枕」に書かれた限りでは、「匂」と「光」の自然に救いのあることは解っていないながら、然もそうした救いの世界に容易に躍り込

めめ程、強い現実的繫縛を持っているのが人間だという、
そういう観察なり実感なりが子規のものであつたといふ
ことが、判然と掴み取られるのであり、そうした現実生
活への執着強さを示していたところに、近代人的な子規
の風貌が鮮かに想い浮べられるのである。それにまず注
意が必要なのだと思う。

現代は云う迄もなく人間の時代である。神とか仏とか
いう人間の上に位置して人間を支配するものが否定され
て、人間絶対の觀念が多かれ少かれ人々に懐かれています
時代である。神の世界や天上の世界は当然見失われて、

人間は人間の住む現実世界のみを唯一絶対のものと思惟するようになっていゝる。そういう時代の人間が、何処に救いがあればとて、何うして現実世界をそうむざむざと放棄することが出来よう。殊に子規は、その仕事や生活振りから云つても、随分執着の強い方だった。虚子の描いた「柿二つ」の如き、そういう彼の執着強さを伝えて恐らく余蘊^{ようん}なきものであろう。自ら容易に起つことも出来ぬ病軀を抱えて、沖津問題で周囲の人々を困らせ、何とかいゝう絵巻物か何かの問題で人々を手古摺らせたといふほど、激しい執着とあれ程の仕事慾とに生き通した彼

は、飽く迄も現実的な、強烈な人間的意欲に生きた、その意味で徹底的な近代人であつたのであり、またそれだからこそ、伝統的な権威も通説的な評価もすべて無視して、ひたすら只管彼自身の判断にのみ頼つた、新しい芭蕉評価を提示し、彼流の短歌革新を成就することなども出来たのであつた。救いの境地を眼前に見ながら、其処にのめり込めない現実生活への執着を正面に押出した「花枕」は、ひととなりそういう彼の為人を最も端的に示しているものであり、それだけ彼の近代人的な苦悩を臆ろ気ならず語っているものとして、注意されていていいのではないかと思う。それ

は恐らく彼の句や歌では容易に触れられない彼の内面の消息に、端的に触れさせるよすがともなるものであるろう。

面白いことに、彼の他の二つの作品は、何れも悲痛な恋愛の記録であるけれども、その何れもが、女の死乃至行衛不明の後に、非常な感動と打撃と苦悩とを身に受けた男が、死にもせず苦悩に塗れた生活が続けるといふ、そういう運びを持っている。「花枕」のヒロインが、「句」と「光」の救いの世界に飛躍しきらなかつたのと、方向は無論異うけれども、兎に角現実世界を飛躍しきれず、そのため泥に塗れ現実苦に喘いでいるという結末は、つ

まり三者すべて同断だということになるのであり、其処に子規の作品の型が見出されるのである。尤も、それは子規にのみ特徴的な型ではなく、「柿二つ」に子規の余りに激しい執着を寧ろ醜いものとして嗤おうとするかに見える態度を示した虚子さえ、その代表作「風流懺法」には、「続風流懺法」の後に更に「風流懺法後日譚」を書添えて、一旦の感激には死なぬ人間の執着強さを味い深げに眺めるといふ、完全なる類型を示しているのである。それは寧ろ元禄の昔、「好色一代男」の西鶴が、死んだ女の一瞥故に「二十九迄の一期何思ひ残さじ」と

迄思い詰めながら、「分別所なり」と思案しかえた世之介を描いた以来の、一つの型とさえなっているものだった。人間が人間の住む現実の世界以外に生きるべき世界を持たぬことを判然と感じた時代の、所謂逞しい現実精神が、それは当然作り出すべき作品の型なのだから、そういう現象が近世現実主義横溢の時代以来永く広く見出されるのも素より当然の事だろう。子規は兎に角そういう文学の型を追う逞しい現実主義者の一人であったのだ。

然も、そういう逞しい現実主義者が、現実に於て観たものは果して何であったのか。それが「匂」と「光」の

自然による救いを望まれる程泥塗れの陰惨なものであることは、「花枕」にも一応書かれていたところであるけれども、さてそれをも少し具体的に描いたものは？——作品「曼珠沙華」が恐らく或る程度その疑問を満たすものであると思う。此作は、所謂身分違いの恋を扱ったものである。が、そういう大まかな観方をする以上に、もう少し細かな説明を必要とする部分も若干含まれているようだ。例えば、

「三百年來の野村治右衛門は、昔から此名、昔から此家、昔から此財産。しんだい藏の壁に附けてある桔梗の紋

は、此處の名物と言はれて變らぬ者の譬に引かれる位であつた。」

と云い、

「野村の内には、大阪もあるさうな。東京もあるさうな。極樂がこしらへてあつて天人も舞ふて居るさうな、此中には凡そ人間が欲しいと思ふ程の者皆出來て居るさうな、と誠らしく言ふ者もある位の繁昌であつた。」

という程、強勢を誇る旧家に、成人してもなおお乳母附きの坊様生活を余儀なくされている主人公が、何がなし不

満と鬱悒とを感じさせられて自由の天地を恋しがるのは、聽て後年の菊池寛がその出世作「忠直卿行状記」に鮮かに剔出して見せた、人間的眞実に生き得ぬものの悩みと焦慮との、早期的な指摘であつたらう。主人公玉枝は、そういう近代人的な苦惱に喘ぐ程の、解放された自我を生きたがる人間であつたから、乳母が氣に病む程の「子供らしい」略装で家を飛び出して、そうして乞食に近い花売娘を、素朴に澆刺としているが故に、自ら選んで恋人とするのである。近代浪漫主義文芸のそれは一つの典型的な型とも云えるような作品の運びであらう。そ

れがすべて明確に意識的な近代的人間主義や主我主義の追及とは無論なっていないなかつたけれども、兎に角子規は此処でも、或る意味では思いがけぬ程の近代人的な心の消息の一端を覗かせているのであつた。

が、「曼珠沙華」に描かれたそうした近代人的な心は、素よりその健全な発展を遂げ得はしなかつた。玉枝の恋は、それが身分違いのものであるが故に、結局表向きのものとはなり得ず、彼はそうした恋人を持ちながら、周囲の者の斡旋に圧されて、恋とは別の、表向きの結婚をするのである。自我の弱さ、独立人間としての自覚の弱

さが、無論其処に認められるのだが、然も、一方には旧家的な制約を嫌って自由にその対象を選もうとする程の解放された心が、そうした自我の眞実への裏切りに恬然としていられる筈もなかつた。結婚当夜に妻を殺そうかと思ふ程の苦悶が其処に生れた結果、彼はまた家を飛び出して花売娘を求め、一旦は得た彼女を再び行衛知れず失つて、熱に犯された狂氣的な病人として家に歸つて来るのである。

我国の浪漫主義は、随所にその文学的表現を持ちながら、終に統一された浪漫主義の運動というものを持ち得

なかつた程、思想的に確立された中心点のない、非凝集的なものであつたばかりでなく、その随所に現れた浪漫的主義断片さえ、総括的には、否定的浪漫主義とか、悲觀的浪漫主義とか、其他等々の類語を以て呼ばれなければならなかつた程、朗かな健常性を欠いていたのだつた。それだけ解放された自我がひ弱く、随つて人間的自発が低度であつたのだが、子規は素よりそうした現象を思想的觀念的に把握していよう筈もなかつた。ただ現象としてそうした自我の弱さや独立人間としての自覺の弱さが齎らす不如意な結果の様々を觀ていたのだ。そうしてそ

れが観念的に明確に裁断出来ぬままに、所詮は割切れぬ人生であり、矛盾と苦悩にのみ充ちた泥濘の人生だと考えることになったのであった。

「曼珠沙華」は、そういう彼の観た割切れぬ苦悩の人生を、彼として力一杯書いて見せたものであったのだと思う。旧家としての制約とか体面とか、自我の真実を被うての結婚を拒否し得なかったが故の苦悩とか、それは今日とすれば既に稍々時代な世界とも思われるけれども、例えば「忠直卿行状記」にそれが観られたように、等類の苦悩や問題は、今日の文学にもなお相当繰返されてい

るのではなからうか。玉枝の選んだ对手の花売娘が、素朴な野性味と澆刺たる強さと本能的な一途さを持っていた如き、天外風葉等同時代乃至稍々遅れた時代の人々の作品に相当多くの類型を見出し得たのであったが、そうした型への関心も、少くとも自然主義以後の文学に、多少は尾をひいていぬこともなかつたのではないかと思う。そう思うと、今日から観れば無論臃ろ気なものではあつたけれども、子規は矢張り近代的な苦悩に、若干先行する貌を示した人であつたということになる訳だろう。兎に角「曼珠沙華」にそうした苦悩を描いた子規で

あつただけに、「花枕」に於ても、矢張り人生を泥塗れの陰惨なものと規定せずには居られなかつたのである。そういう人生に執着強く繋がれて、それを超脱出来ぬのが人間の宿命だと観じた時、子規の世界は随分暗いものでなければならなかつた筈だと思ふ。その不治の疾患を別にしても。

けれども、その割に子規の世界が暗くなかつたのは、矢張り、「花枕」に書かれていたような、「匂」と「光」の自然による救いが夙くから考えられていたからであるうか。それとも、自我主義や人間的眞実尊重主義がまだ

成長期にあった明るさが、その不如意を觀ても、必しも昏迷的な絶望に連らず、自然美への沈湎による救いなどを、明るく考えさせる余裕を残していたと解釈した方がいいであろうか。残されたも一つの作品である「月の都」は、その結末近く、添い得なかった恋人の死後肉体と精神と両方の漂泊を続けた主人公が、「淺緑に白帆を散らしたる三保の海の曙」の景觀に打たれて、「白銀の描打ち捨てし西行が、見とれたる心の内、世の俗人は何とか見るらむと獨り微笑む」ことを描いている。まだその後が多少あるだけ一途にも云えぬことであるけれども、少

くともそれは、「花枕」に於けるよりもっと強く、自然美への沈湎による苦悩からの救いを正面に押出したものとは云えるのではないかと思う。そういう点から云えば、子規の小説は、離脱しきれぬ人生的苦悩に喘ぐ心と、自然美への沈湎による救いを思う心との、その両者の間を彷徨して、随ってその何れにも傾ききれない中途半端さに止まって居り、そのため折角触れかけた近代的な苦悩などをもほんとに掘下げきる事が出来なかつたといふ、そういうことになっているのであった。その片づかなさが、十年を距てた余裕派の時代になってはつきり整

理されるとともに、一方には自我主義や人間尊重主義の
圧歪められた時代の暗さが徹見され、一方には俳諧派文
学の完全なる情趣第一義の主張が打樹てられることにな
って行つたのだが、さてその当の子規の場合、そのまだ
十分には片づかなかつたものが——云換えれば当時の子
規の心境の最も奥深いところにあつたものが、彼の歌や
俳句には何う反映していたのであるか。それともそう
した苦惱は歌や俳句には直接的な反映を持たなかつたの
であらうか。それが十分反映させられていたとすれば、
彼の俳句や歌は、単なる花鳥諷詠の感覺詩としての境地

を脱して、其処に小説を孕んだ、近代詩としての一風体を確立し得たことになる。が、例えばその俳句觀に於て、幾らかずつそうした苦惱を孕んでいた漱石の作品を、写生に徹せぬものとして却けた彼であつてみれば、それは矢張り望まれぬことであつたらうし、もともと俳句とか短歌とかいうものの形態的な制約や伝統がそれに適しなかつたことも、二云う迄もないところであらう。とすれば、そうした彼の云わば表向きの作品には多く現れていない彼の内面的な問題を窺知させるよすがとして、これらの小説が相当重視されてもいい訳だと思ふ。況してそれが、

わが近代文学一般に現れた典型的な問題の幾つかを、比較的夙い頃に於て提示しているものであるに於てをやである。ただ、その提示し方に、所謂小説的なコクや厚みは乏しく、それだけ文豪子規の小説としては、慊らぬ憾を感じさせるけれども。

(昭和十二年九月 『短歌研究』)

日本文学電子図書館

子規の小説

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

底 本：「近代日本の作家と作品」

岩波書店

昭和14年11月10日 印 刷
昭和14年11月17日 第1刷発行

日本文学電子図書館